

テーマ展

ふし道

東海道の旅と宿場

道祖神



道

「み・ち」の語源説によれば、みちの「み」は事柄を美しくいうための音であって、本来は「ち」であると言われる。「ち」はあっち、こっちのちと同じ意味で、漠然とある方向、方面を指している言葉である。

人間が道を開いて往来するようになる以前に、山野に生息する動物によって、いわゆる鹿道が開かれていた。動物にとっても、獲物を追うためにある方向に行ったり来たりする道が必要であった。初期の人間の道は、こうした鹿道に人工の手を加えることによって、改良され、次第に発達してきた。すなわち、道に沿って、動物世界から人間世界が開かれるようになった。

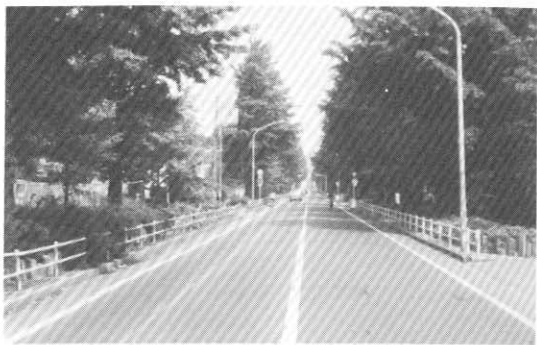
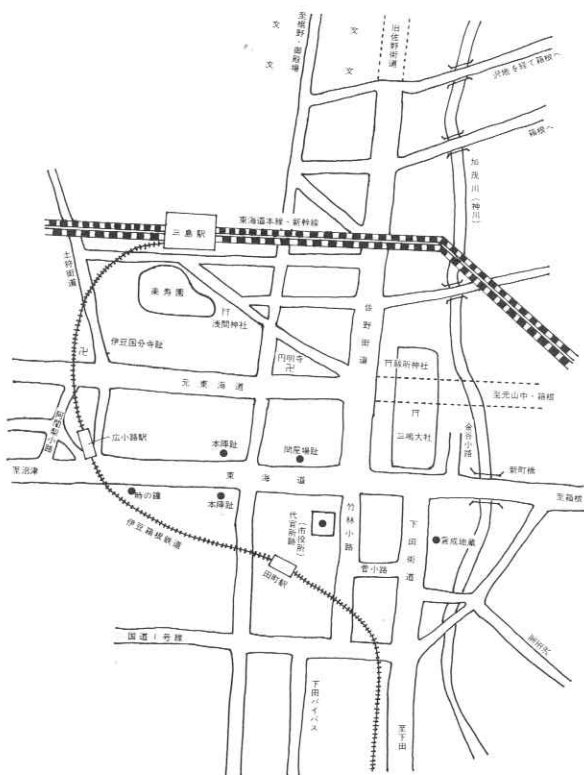
奈良・平安の時代になると、全国ははじめて五畿七道に区分されて、真の人間の道が整備された。五畿、つまり畿内を中心に七道が全国に延びて、中央の文化は地方へ、地方の文化は中央へと交通が開始された。

交通の中心は人間になった。人間が歩いてこそ道が形成されると言える。道がもつ方面性とそこを歩く人間、両者は交通の成立する重要な要素である。

三島の道

三島は昔から陸上交通の要地として栄えた所である。東西には日本の大動脈東海道が、南北には甲州や信州等の国と伊豆半島を結ぶ道が走っていて、三島はその両線が交差する要に位置してきたからである。

東西交通の主流である東海道が整備されて、箱根越えのための道が三島を通過し、いわゆる足柄路から箱根路へと変わったのは江戸時代に入ってからであった。このころ、国分寺前の道から祓所神社を経て元山中へ登って行く元東海道（裏道）が、現在三島のメインストリートになっている東海道へと本線が移ったのであった。南北交通の道には、下田街道と佐野街道がある。下田街道は、三嶋大社を起点に、田方平野・伊豆中央山地を抜けて半島南端に出る、伊豆の本流である。



銀杏並木の道
三島から北へまっすぐ延びる現在の佐野街道

またこの道は、頼朝をはじめ伊豆の武将達や一般の人々にとつねの、三嶋大社参詣の道でもあった。

佐野街道は、三島と北の方面を結ぶ道である。また、浅間神社を起点にした富士登拝を目指す庶民の富士登山道も、三島と富士山を直結する重要な道であった。

このような東西・南北を結ぶ道を往来したものは、各地の物資であったり、人間の心であったりした。両線の要に位置して、三島は、さまざまな文化を吸収し、また三島の文化を各地に送り出してきた。この文化の交流に、道が果たした役割は非常に大きい。

三島八小路

三島の宿には、東海道を本流にした小さな小路が何本も南北に並んでいた。宿の人々はそれぞれの小路に名前を付けて親しんでいた。生粋の三島子は、こうした小路の一本一本を熟知していることが自慢であった。箱根の関所を通る時、三島の八小路を暗誦できれば、三島の人だと証明できて通行を許されると伝えられる。

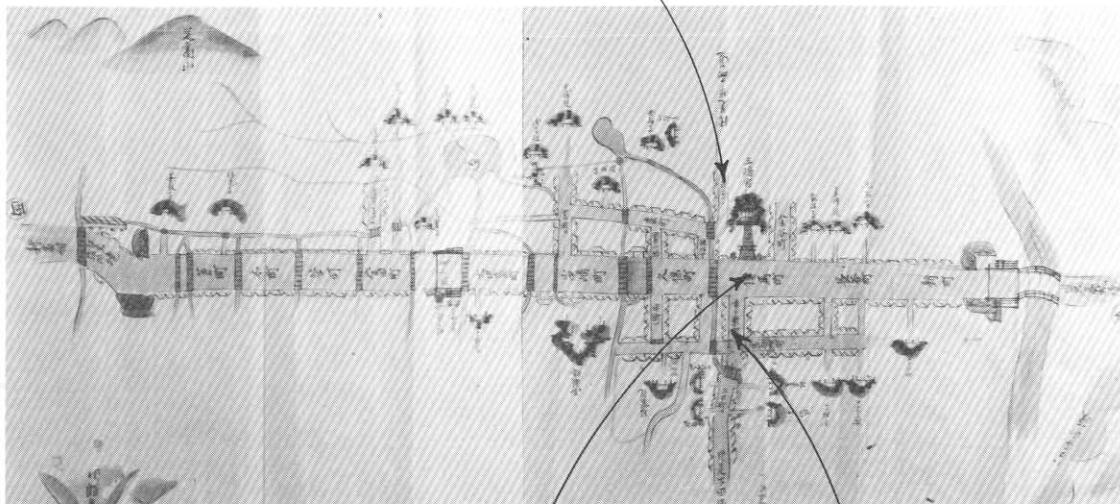
桜小路、竹林小路、上の小路、下の小路
阿闍梨小路、細小路、金谷小路、菅小路



萩ヶ窪の佐野街道
新道開通以前は写真のような集落が街道に沿ってあった。



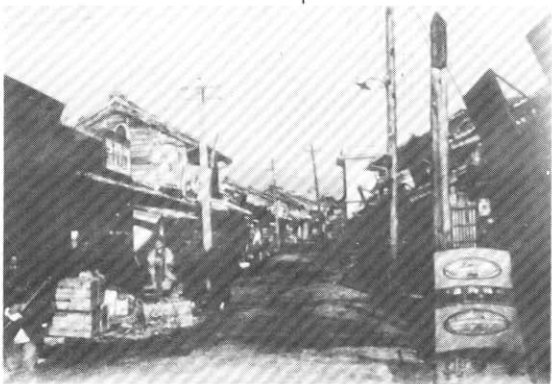
佐野街道の道標（市内文教町にある）
昔は、現在の道より東側を通過していた。



三島宿街道図（小西政三氏提供）
江戸時代の主要道東海道から南北に道が延びているのがわかる。



東海道（朝霧一広重）
早朝の三島宿を旅立つ旅人は、一路東海道を箱根へ向かう。



下田街道
三嶋大社を起点に伊豆に向かって延びる。昔は門前町として栄えた通りであった。

箱根路

箱根道が足柄道に代って東海道の本道になったのは、徳川家康が関東に入ってからのものであった。箱根山は急速に開発されて、関所が設置されたり、小田原や三島から人を募って箱根宿が設置されたりした。

箱根峠を境に小田原側を東坂、三島側を西坂と呼んで、開発が進められた。西坂には豆相近郷の二、三男が入植して五ヶ新田が開かれた。

しかし、旅人にとっての箱根八里は急坂有り、関所有りの難所には変わりなく、さまざまな箱根越えのエピソードを残している。



箱根宿と関所



接待茶屋の茶がま



所々で交差する新道と旧道



雲助徳利の墓



石道



一里塚



松並木

交通施設

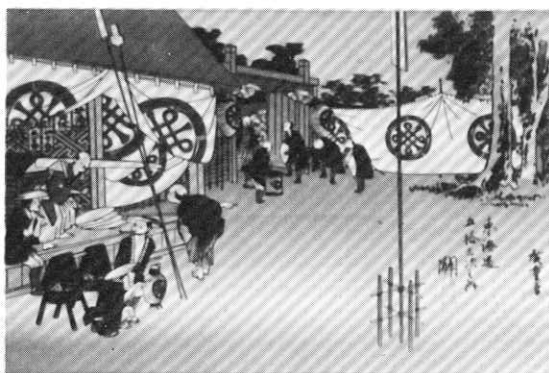
高速道路にインターチェンジ、検問所、サービスエリア、道路標識などがあるように、昔の、人が歩いて通行する道にも交通をよりスムーズに、より安全にするためのいろいろな交通施設があった。

川に架けられた橋は簡単な板や丸木を渡しただけのものから、架橋技術の発達によって、大規模な橋へと進歩してきた。

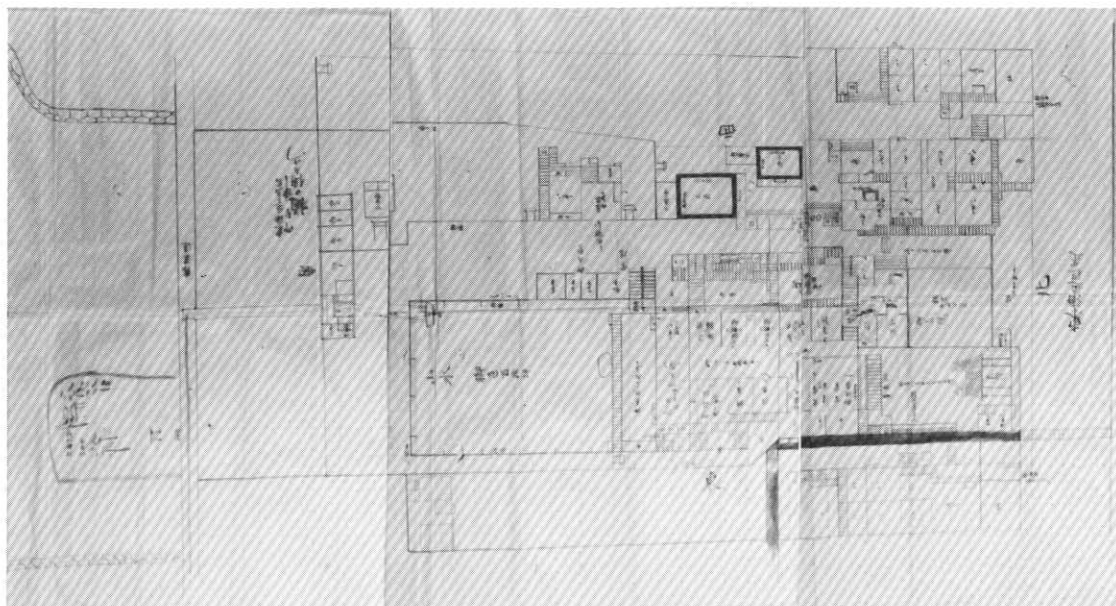
東海道には五十三の宿場があったが、この宿場もまた、江戸時代の重要な交通施設であった。三島宿には、大名や公家の泊まる本陣が二軒と一般のはたごがたくさんあって、大へん賑わっていた。

箱根に設けられた関所は、今風に言えば検問所で、街道を往来する人々にとってはなかなか難所であった。

この外にも、道標、茶屋など、いろいろな交通施設によって、交通の便宜がはかれていた。



本 陣 （関の本陣—広重画）



本 陣 間 取 図 （樋口正智氏蔵）



高 札
三島では三嶋大社前に高札場があった。



接 待 茶 屋（鈴木とき氏提供）
昭和初め頃の接待茶屋である。

江戸時代の旅

街道が整備され、交通の便が良くなったとはいっても、江戸時代の旅は現在とは比較にならないほど困難であり、旅に出る人の数も限られていた。それだけに、旅をするということは、その人の人生において、何ごとにも変えがたい貴重な経験であった。旅日記に綴られた諸国のめづらしい話題は、旅に憧れる多くの人々に新鮮な感動を与えたのであった。

東海道を往来する旅人のうちでもっとも大がかりな団体は、なんと言っても大名行列であっただろう。江戸時代後半になると、伊勢参りを筆頭に諸国の社寺参詣の旅が普及し、一般庶民の間で講を組織し、旅に出る者が目立ってきた。有名な「膝栗毛」の弥次喜多も伊勢参りが目的の旅であった。

その外にも僧、職人、芸人、武士など、種々の階層の旅人の往来によって宿場は賑わいを見せていた。こうした人間や物資のひんぱんな交通によって、さまざまな文化の交流が行なわれ、新しい文化が根付いていった。

旅姿



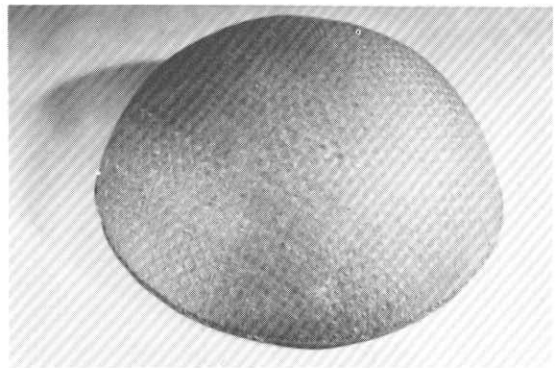
やじさん、
きたさんの旅姿



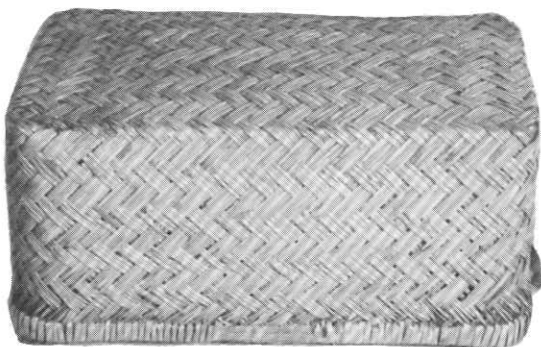
← 旅芸人 (広重画)



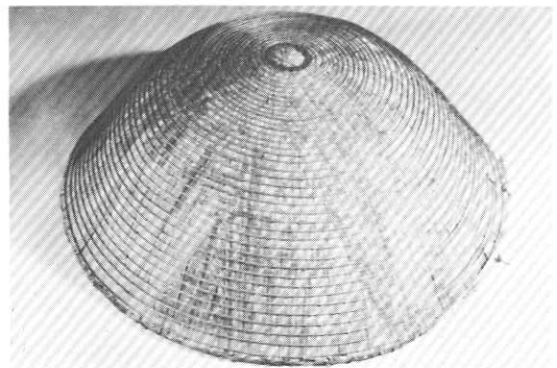
わらじ



まんじゅう笠

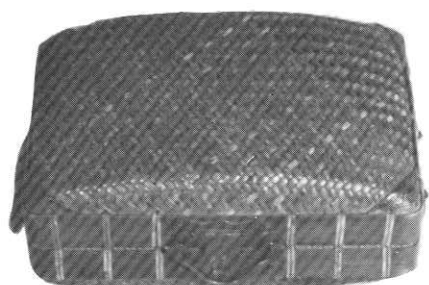


行李



まんじゅう笠

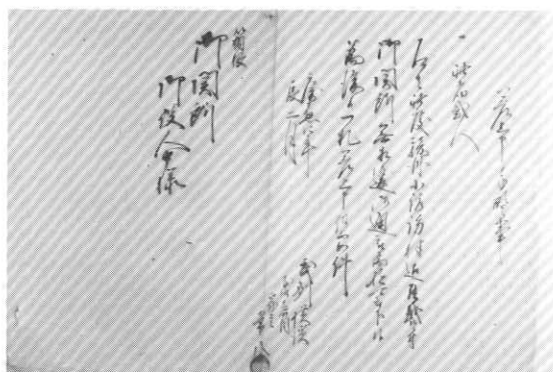
もちもの



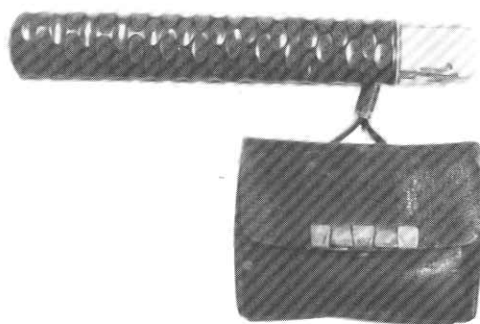
弁当入れ



火打道具



手形



腰差たばこ入れ



道中日記



講定宿帳

やど
宿



は た ご



すすぎだらい



講定宿になっていた三島のはたご



三島みやげの代表・三島曆

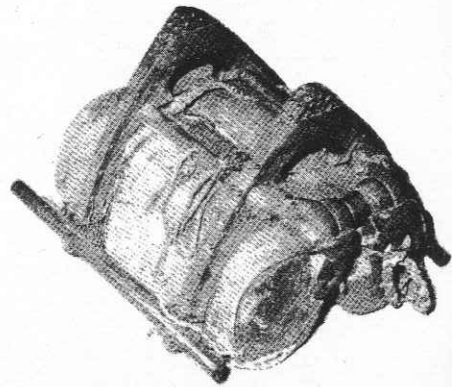
はこぶ (運搬具)

道が果す大きな役割の一つに、物資の移動がある。もっとも原始的な運搬方法は、人間が手に持ったり、頭に乗せたり、背負ったり、肩に担いだりして運ぶ人力運搬であった。

牛馬が運搬の動力に利用されるようになると、運送能力は倍增した。荷物を馬の背に乗せたり、牛に荷車をひかせたり、大量の物資の移動が楽になった。



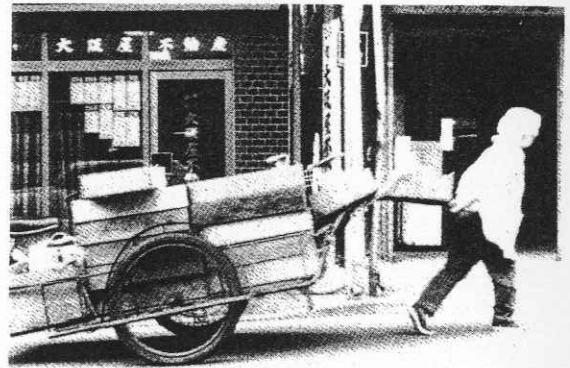
馬の背で荷をはこぶ (大正頃の箱根)



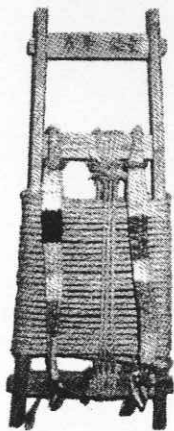
馬の背につける鞍



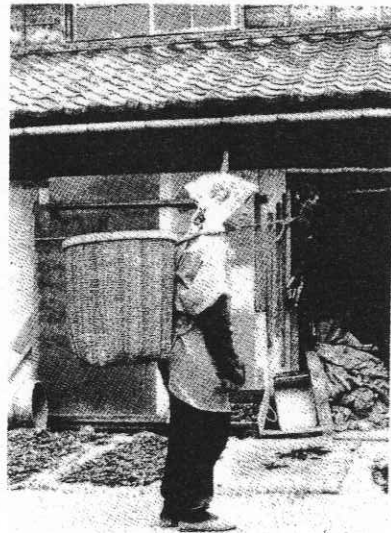
てんびんに担いで物売る



リヤカーに野菜を積んで売る



人の背で荷をはこぶ (ショイコ)



人の背で荷をはこぶ (ポーラ)

村

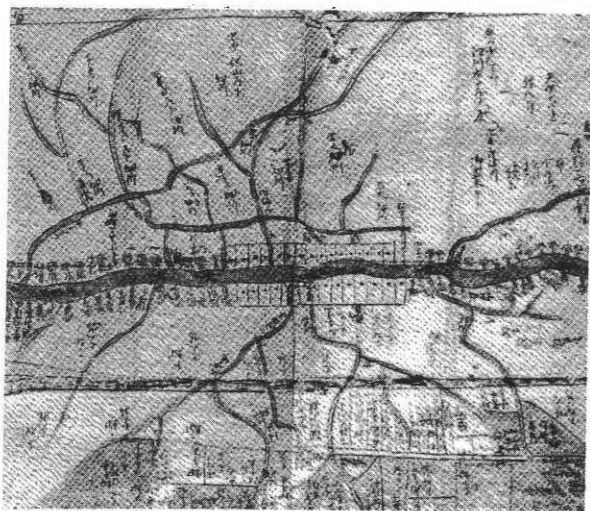
東
村々
村の
もある
集落
畑に
神社
村人か

村の道

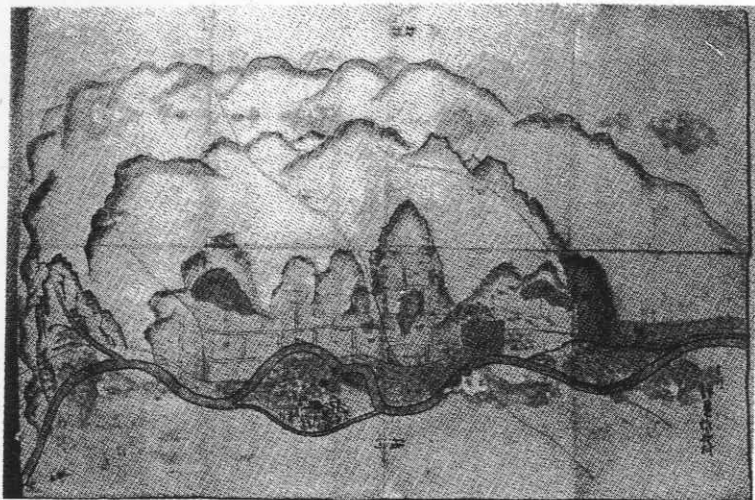
東海道や下田街道などの幹線道から外れた村々にも、村の道が走っている。村の道は、村の産業道路であり、村人の生活交流の道でもある。

集落から山林へ向う山道は林業道、水田や畑に向う農業送等が村の景観をつくっている。

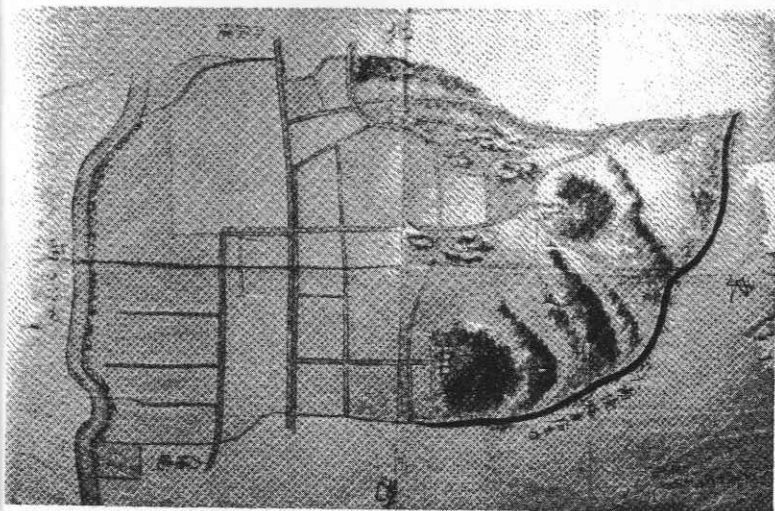
神社や寺院へ向う道は、村の信仰道であり、村人が触れ合う人情交流の道と言える。



三ッ谷新田地図 (細井要氏蔵)



伊豆佐野地図 (勝俣巖氏蔵)



多呂地図 (新井典衛氏蔵)

道の神

ある村をたずねた時、路傍や村の辻にいろいろな石碑を見出すことができる。道祖神、庚申塔、馬頭観音碑等々。

これらの石碑は村の神であり、また道標にもなっている。

村をおとずれる者はかならずしも歓迎すべき客ばかりではなかった。時には流行病が、^{はやりやまい}時には気象災害が村を襲った。こうした人の力によっては防ぐことのできないおとずれる者は、神の力によって、村の入口を防備する以外方法は無かったのであろう。

道祖神は、この地方ではサイノカミと呼ばれ、熱心な信仰を受けている。古くはフナドノカミ「岐神」、クナドノカミ「来名戸」などと呼ばれたようだ。サイノカミという言葉には、「塞ノ神」という字が使われ、村へ侵入する災わいを塞ぐと信じられている。「道の神」の代表的なものと言える。



か っ け 地 蔵



し ば 切 り 地 蔵



路 傍 の サ イ の 神



馬 頭 観 音



三島市郷土館

〒411 三島市一番町19-3

TEL0559-71-8228